

ヴィッラ・マダマ、ジュリオ・ロマーノ作《ポリュフェモス》解説

深田 麻里亜 （東京藝術大学大学院）

ローマ北西部のモンテ・マリオに1518年頃～1527年にかけて建設されたヴィッラ・マダマは、建築家ラファエッロの未完の大作として、これまで熱心な研究対象となってきた。一方、教皇クレメンス7世がラファエッロの弟子たちに実施させた内部装飾に関する研究は、必ずしも詳しくはなされていない。本発表では、庭園に望む3つの径間からなるロτζジャのうち、右廊と通称される北東側径間に表されたポリュフェモスの物語を取り上げ、作品の文学的典拠と意味解釈に関する考察を、細部描写の観察に基づき試みる。

ロτζジャのヴォールトには、オウィディウス『変身物語』、フィロストラトス『イマギネス』に基づく場面を中心とした装飾が施されている。右廊では、南東側半円ドームと北東側壁面リュネットの二面にわたり、ポリュフェモスを扱った浮彫と絵画が展開される。半円ドームでは『変身物語』に基づくポリュフェモスとガラテア、アキスの物語がストウッコ浮彫による10点の小場面で表され、リュネットにはジュリオ・ロマーノによって描かれた《ポリュフェモス》のフレスコ画がある。大きく身体を横たえる巨人の姿は、酩酊して眠る間にオデュッセウスらに眼を潰されるエピソードを想起させるものであったためか、ホフマンとハートはここに「苦痛に耐える姿」という概略的解釈を与えるに留まった。

『変身物語』では、ガラテアとアキスの物語の後、ポリュフェモスが眼を潰されるホメロス由来の説話が記されているものの、眼潰しの図像で通例描かれる巨人の眼に杭を突き刺す人々がここでは不在であることは、注目に値する。細部を観察すると、ポリュフェモスの周囲で戯れるサテュロスたちの存在は、エウリピデスのサテュロス劇『キュクロプス』を想起させ、更に巨人の足の親指をサテュロスがテュルソスで測るという描写は、プリニウス『博物誌』に記された古代の画家ティマンテスの「眠るキュクロプスの小さなパネル画」のエクフラシスと一致する。加えて、ポリュフェモスの洞穴内部に見られる炎がともった祭壇とヘルメ柱、楽器を演奏するサテュロスは、バッコスの供犠を表しているともみなすことができるため、このポリュフェモスは酩酊状態で眠っていると考えられる。

更に、祭壇の炎は、おそらくガラテアへの愛というテーマも同時に示唆していると考えられる。なぜなら、テオクリトスの『牧歌』以降、牧人ポリュフェモスの恋慕をガラテアへ宛てた詩歌に仕立てた古代の著述では、ポリュフェモスは愛ゆえに盲目となったと喩えられ、洞穴内の炎は愛を示すと解釈されるためである。出入口の開放された洞穴の中、巨人の眼を潰す者は描かれておらず、文字通り「ウーティス＝誰でもない」状態である。一方、すでに盲目となった巨人は、「誰も愛から逃れられない」、つまりは「愛はすべてを打ち負かす」（ウェルギリウス『牧歌』）と通底する概念を連想させているとも解釈できよう。以上の考察から、この作品は古代の諸著作に典拠を求めつつ、単なる眼潰しのエピソードではなく、半円ドームのストウッコ浮彫連作と密接に関連し合った愛のテーマを表現していると推測できるのである。